

[シンポジウム]

「ギヤスケル文学から学ぶもの」

コーディネーター 東郷秀光

女性がおかれた困難な境遇に対する関心がギヤスケル文学の特徴の一つです。これは *Mary Barton* から *Ruth, North and South*, *Sylvia's Lovers* に至るまで明らかです。ここでは著者は問題を読者に訴えているように見えます。しかし最後の長編小説 *Wives and Daughters* では問題性は姿を消しています。ギヤスケル文学の中心はどこにあるのでしょうか。短編 *Lizzie Leigh*, 伝記 *The Life of Charlotte Brontë*, 最後の作品 *Wives and Daughters* からこの点に迫ってみたいと思います。

「リジー・リー」 代弁者から共感者へ

多比羅真理子

『シャーロット・ブロンテの生涯』 ギヤスケルの共感と観察

山脇 百合子

『妻たちと娘たち』 日々の生活が人生のすべて

東郷 秀光

